

東北大学病院総合防災訓練の企画開催に参画しました。(2014/12/19)

場所：東北大学病院（仙台市）

テーマ：「災害拠点病院として地域医療支援もミッションとする大学病院の災害対応」

12月19日（金）に東北大学病院の総合防災訓練が開催され、江川新一教授が大学病院の災害対策委員の一人として企画の段階から中心的に関わりました。東日本大震災の被災地の中心に位置する大学病院で当時を体験した職員が大部分ではあっても、大学の人事システムにより配置換えや新しい人材が常に入ってくるため、災害対策委員も常に入れ替わっています。大学病院は病院の事業継続性計画としてミッションに応じた災害時アクションプランを持っていますが、その検証の場としても大変有効な機会です。

今年度の防災訓練は、直下型地震で青葉区内に震度6弱の地震が発生し、多数の傷病者が発生している状況を仮定しています。病院長をはじめとする首脳部、各診療部門の代表、事務職員が20分で災害対策本部を立ち上げ、災害対応マニュアルの規定にそってレベル3（通常の診療を中止し、多数傷病者の受け入れを行うレベル）の災害を宣言しました。建物の構造はひび割れが多少あるものの、使用に問題はなく、ライフラインの状況は、非常用電源に切り替わり、院内LANは稼働可能、水道は一時停止したものの短時間で復旧、ガスは停止し暖房や調理はできない状況などの想定がつぎつぎと明らかになります。エレベーターは病院機能にとって非常に重要なものですが、ヘリコプターが着陸できるように、ヘリポートに繋がる1基のみを奇跡的に復旧させることができたという状況です。

医師・看護師が救命救急センターに駆けつけてチームビルディングを行い、緑、黄色、赤、黒のトリアージエリアを設置運営開始すると、ほぼ同時に医学部4年生が模擬患者として多数受診する状況、救急車で来院、さらには大崎市民病院からヘリコプターで救急搬送要請があり、それにも応えるというものです。災害対策本部は、大学本部や省庁への連絡、宮城県災害対策本部との連絡、患者食や職員食の手配、地域の医療機関の情報把握など、災害拠点病院かつ地域の医療支援拠点としての情報収集と調整を本番さながらに実施していました。ICTの活用として病院内の被害状況や問題をすばやくとらえ、情報を共有し、解決策を見出すために、アシストしてくれるツールが昨年度にひきつづき導入されています（写真）。問題箇所を把握すると同時に情報が入らない部署が甚大な被害にあっている可能性も把握できるようになります。毎月1回、緊急訓練放送が聞こえたかどうかを入力して活用しています。また、今回初の試みとして、厚生労働省の管轄する広域災害救急医療情報システム(EMIS)への訓練入力が導入されました。阪神淡路大震災のあとに整備され、東日本大震災時にはさまざまな事情により宮城県内でうまく活用することができませんでしたが、2014年夏に大幅に改訂され、地図情報と病院や避難所の状況、ライフライン、受け入れ患者数、DMATの活動内容、各活動拠点のクロノロジー（時系列記録）などを把握するための情報システムです。地域内の他の病院の状況や支援の状況を把握して共有することもできます（写真）。

終了後は、各部署からの反省点をアンケートならびに全体会議として集約し、来年度の訓練への検討課題を明らかにしていきました。事業継続計画(BCP)が成功する要因のひとつに、組織の長が先頭にたって推進することがあります。病院長が先頭にたって訓練を本番さながらに対応する大学病院は被災地ならではの、東北大学病院の総合力をみる思いでした。

震災の教訓はまだまだ体に染みついています、風化させないようにこのような訓練を繰り返

していくことは大変重要です。平常時にできないことは災害時には絶対にできないということを胸に、現実的な問題解決の訓練を積み重ねています。



対策本部長をつとめる下瀬川病院長



院内の人的・物的被害状況が一目でわかる情報共有システム



発災後 90 分に開催された第 1 回災害対策会議の様子



つぎつぎと訪れる模擬傷病者は自分の病状を詳しく記載したカードをもち矛盾がないように配慮できる



救急車から降ろされたあと、ゲートコントロールでトリアージされる模擬患者



重症患者を受け入れる赤エリア



軽症者で混雑する緑エリア

施設名称	東北大学病院
登録時刻	2014/12/19 13:43:26
状況が必須な状態です。	
操作:	
緊急時入力 (災害直後情報) 更新日時: 2014/12/19 13:43:49	
避難状況	
入院患者の避難、または避難の恐れ	無
ライフライン・サブライフライン	
電気の通電の状況	不可
水の通電の状況	可
医療カスの不足	不足
医薬品・衛生資器材の不足	充足

広域災害救急医療情報システム(EMIS)の訓練モードに入力された東北大学病院のライフライン状況

文責：江川新一（災害医学研究部門）、写真：佐々木宏之（災害医学研究部門）